

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02674

研究課題名(和文) 授業研究を通じたプロフェッショナル・キャピタルの構築に関する実証的研究

研究課題名(英文) Construction Professional Capital through Lesson Study: An Empirical Research

研究代表者

千々布 敏弥 (CHICHIBU, Toshiya)

国立教育政策研究所・研究企画開発部教育研究情報推進室・総括研究官

研究者番号：10258329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はハーグリーブスとフーランによるプロフェッショナル・キャピタルの枠組みに従い、学校の人的資本、社会関係資本、意思決定資本が授業研究を通じて組織的に変容する構造を分析した。授業研究の手法は様々提案されているが、いずれの手法においても鍵となるのは教師の省察の深さと教師エージェンシーである。本研究では教師集団がエージェンシーを発揮することと省察を深めることが相互に影響し合う状況を意思決定資本とし、社会関係資本、人的資本と循環しながら拡大している枠組みを設定し、教育委員会の指導行政を通じて学校のエージェンシーが発揮され、社会関係資本が増大すると同時に校内の省察水準が深まる事例を複数分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

授業研究については教授学に焦点を当てたものと、それを技術的省察に偏ると批判して子どもの学びに焦点を当てたものに大別することができる。これまではこの二つの立場は対立概念でとらえられていたが、本研究の枠組みを使用するといずれの立場においても省察水準を深めることが重要と解釈可能になる。また、教育委員会の指導行政は学校の主体性を阻害するという文脈で批判する先行研究が見られるところだが、本研究の枠組みを使用すると、学校のエージェンシーと省察を促進する文脈において教育委員会の指導行政は有効に働く、と解釈することが可能になる。

研究成果の概要(英文)：Following Hargreaves and Fullan's framework of professional capital, this study analyzes the structure of the organizational transformation of schools' human capital, social capital, and decisional capital through lesson study. Various methods of lesson study have been proposed, but the key to any of them is the depth of reflection and agency of the teacher. In this study, we set up a framework in which the situation in which teachers' agency and the deepening of reflection mutually influence each other is defined as decisional capital, which is expanded in a cyclical manner with social capital and human capital. We analyzed cases in which school agency was exercised through the coaching by the educational committee, and at the same time, the level of reflection within the school was deepened.

研究分野：教育経営学

キーワード：エージェンシー リフレクション 省察 ソーシャルキャピタル 社会関係資本 組織開発 教育委員会 指導主事

1. 研究開始当初の背景

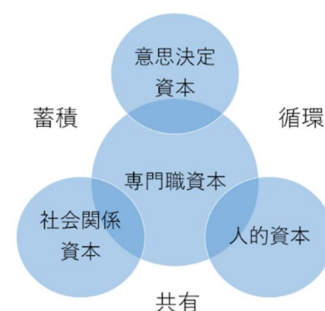
授業研究は今や世界的に広がっている学校の組織開発及び教師の力量向上に資するプログラムであるが、その手法は多岐にわたり、どのような手法が有効なのか、議論が続いている。本研究はプロフェッショナル・キャピタルの枠組みを使用することで授業研究により学校組織にどのような変容をもたらされるのかを明らかにすることで、授業研究の多様性を解釈する視点を提供しようとした。

2. 研究の目的

本研究は授業研究を通じて教師の力量が向上し学校が組織的に変容する構造を、プロフェッショナル・キャピタルの枠組みを使用して解明することを目的としている。プロフェッショナル・キャピタルとは、教師の力量を教師個人の知識や実践場面で働く技能面と同時に教師を取り巻く集団の両面からとらえる枠組みである。

ハーグリーブスはフーランとの共著により『プロフェッショナル・キャピタル』を2012年に刊行した(邦訳『専門職としての教師の資本』2022年)。学校教育及び授業を改善していく基盤としての資本をプロフェッショナル・キャピタル(専門職資本)と命名し、ヒューマン・キャピタル(人的資本)、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)、ディシジョナル・キャピタル(意思決定資本)の三者の融合で構築されると考えている。

人的資本、社会関係資本、意思決定資本の関連構造は、図のように示されている。三つの資本が相互に関連しあい、循環・共有されながら蓄積していくことで全体の資本が増大していくイメージである。『プロフェッショナル・キャピタル』は意思決定資本の例としてアクションリサーチのみを取り上げているが、『協同的専門職』では香港の授業研究が紹介されており、授業研究を意思決定資本の具体的な場としてとらえていこう。



木村優「専門職の資本とその要素」
『教師としての専門職資本』p223

授業研究は意思決定資本の場と言えるが、同時に人的資本や社会関係資本の場とも言える。授業研究で教師個人の授業力量が育まれるし、教師集団の同僚性を育むこともできるからである。本研究が意思決定資本としての授業研究に注目しているのは、共同省察の場としての性質である。社会関係資本や人的資本は共同省察を促進する条件となったり共同省察により増大したりするものととらえる。

3. 研究の方法

本研究は、開始当初は量的調査を想定していたが、事例調査で研究を進めることとした。その前に、授業研究を巡る二つの立場を検証した。

佐藤学は教材解釈と発問技術を議論してきた旧来の授業研究を「技術的实践を志向する授業の科学」と表現している。対して佐藤が提起した新しい授業研究は「反省的实践を志向する授業の探究」であり、教材解釈や指導計画よりも授業の中で生起している教師と子どもの関係、子どもの学びの事実を読み取り、省察することを重視している。

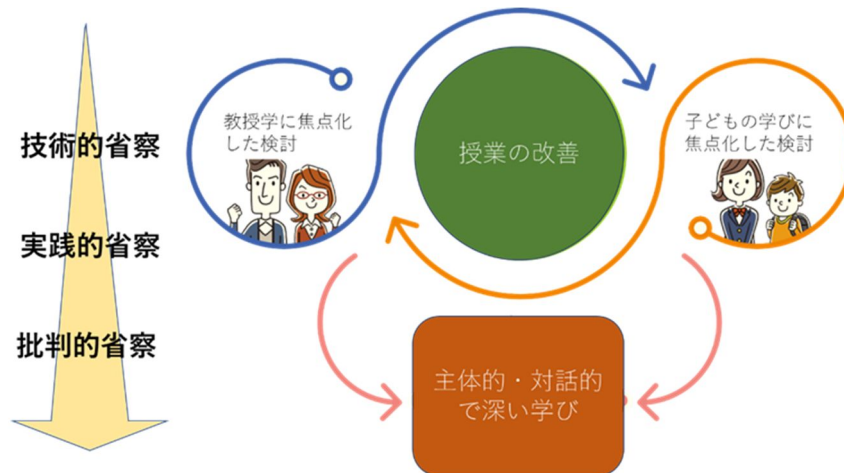
佐藤学による授業研究批判とその後の流れを分析した石井英真は「実践の理論化」をめざした教授学研究の系譜は、(略)授業研究や教育方法学の歴史から忘却されることとなり、「教えることから学ぶことへ」という二項対立図式と「学び」の一面的強調によって「教えること」を対象化する理論的関心や教えるという営みの主体性や規範性への問いはタブー視され、空洞化することになった」と批判している。石井は2020年『授業づくりの深め方』を刊行し、教授学で積み重ねられてきた教師主語による授業改善の視点の意義を再提案している。

両者の先行研究を併置すると、教授学に焦点化した検討でも子どもの学びに焦点化した検討でも、いずれも意思決定資本を高めることは可能と考えられる。そこでバンマネンの省察論で両者の意義を説明することとした。

マックス・バンマネン(1977)は、省察を技術的省察、実践的省察、批判的省察の3段階に区分している。技術的省察とは、ある目的を達成するために、汎用的な原則を技術的に応用することである。ところが実践の場では相反する原則が存在し、複数の技術的勧告が可能な場合が多い。そこで教育上の意思決定を行う際には、本人の教育経験の解釈的理解を元に実践的な選択を行うこととなる。そこで働くのが実践的省察になる。実践的省察とは、個人的な体験、認識、信念等を分析し、実践的な行動を方向付けることである。実践的省察の背後には教育目標や教育経験が存在している。それらの価値を深く考え、その背後にある社会的な制約やイデオロギーを批判的に省察するのが批判的省察である。以上のバンマネンの枠組みを参考に、本書における省察類型を以下のように考えてみた。

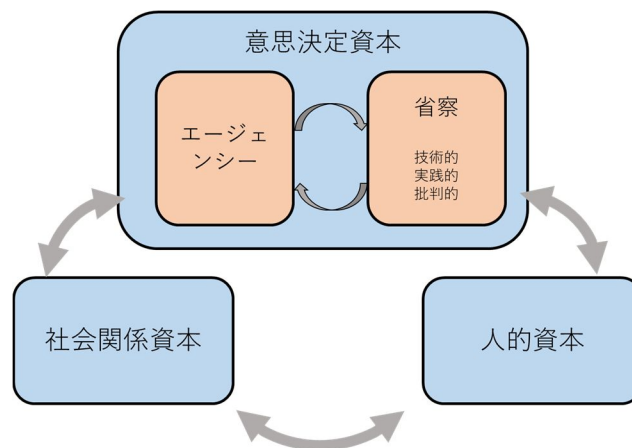
前節で考察した授業研究の二つの立場にバンマネンの省察三段階論を加えると、下図のよう

に整理することができる。佐藤学が批判した授業研究は、教師主語による授業改善自体の問題でなく、教師主語による授業改善が技術的省察レベルにとどまっていることが問題なのである。石井英真が依拠する伝統的な教授学は、いずれも省察のレベルが批判的省察の水準まで高められている。



本研究では、省察の段階を深めるためにエージェンシーの視点を取り入れることとした。エージェンシーとは主体性と似た文脈で使用される概念であり、既存の社会的文脈の中で主体的に問題解決に取り組む姿勢をエージェンシーと称している場合が多い。教師の主体性は、これまで教師の自律性の文脈で語られてきた。プリストリー(2015)は自律性だけではエージェンシーは達成できないし、目標やプロセスを示す外部の施策によってエージェンシーが形成されることをもって、エージェンシーは自律性と異なると説明している。カルバート(2016)は教師に研修のための権限を与えることが力量向上のすべての課題を解決するわけではないとしている。カルバート(2016)は、教師エージェンシーを教師が職能成長に向けて目的意識をもって構造的に努力する能力であり、同僚の成長にも寄与すると定義した。カルバートの分析によると、教師のエージェンシーを尊重する校長のリーダーシップ、教師のネットワーク、小さな改善から始めて教師が意義があるかを認識することが教師のエージェンシーと職能成長に影響している。エージェンシーを巡る以上の先行研究の指摘から、省察を深めることとエージェンシーは相互に影響し合う関係にあるといえる。

以上に考察したプロフェSSIONAL・キャピタル(専門職資本)、省察とエージェンシーの関連構造を図示すると下のようになる。学校の中では個々の教師の力量など人的資本と人間関係を主とする社会関係資本が絡み合いながら教師集団を形成するが、教師集団が成長するためには授業研究やカリキュラム・マネジメントなどの集団意思決定場面が重要な役割を果たす。集団意思決定においては、個々の教師のエージェンシー、教師集団のエージェンシーを基盤に、個々の教師、教師集団が省察を深めていく。省察の積み重ねがエージェンシーを増大することもあるし、社会関係資本を増大することもある。



4. 研究成果

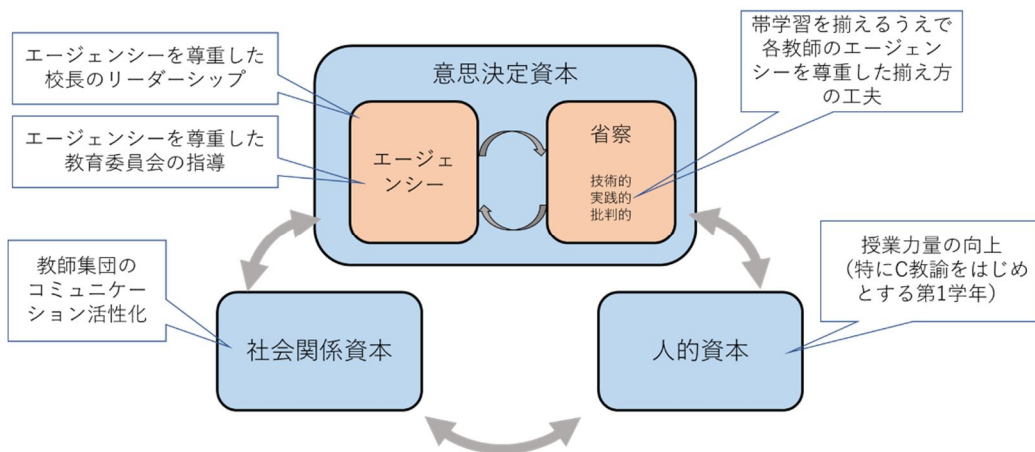
上記の枠組みを使用し、事例校(M市立M小学校)を分析することとした。この学校はY校長が2018年度から3年間勤務している間に、全国学力調査及び市が独自に実施している学力調査の成績が大幅に改善した。その要因として校長が教師エージェンシーを尊重するリーダーシップを発揮し、ミドルリーダーが活躍したこと、学年集団の共同エージェンシーが機能していたこと、それらの背後に市教育委員会の学校エージェンシーを尊重した支援体制が存在していたこと

とが考えられる。

M市教育委員会は2019年度から市の学校訪問体制を変更した。それ以前から計画的な訪問は実施していたが、その回数を年3回に増やし、指導主事複数名による訪問を行うこととした。訪問にあたっては校長に学力向上に焦点化した学校経営計画の提出を求め、その学力向上策が実施できているかどうかという観点で学校を訪問して指導するようにした。学校経営に関する指導を行うために退職校長を首席指導主事として雇用し、現職教師から異動してきた指導主事と一緒に学校を訪問するようにした。

首席指導主事もY校長も、学校が変容したのはY校長3年目の2020年度であると語っている。それは2019年度における訪問で授業内容について指導を受けたことを契機としている。M市では毎日10分から15分の短時間に基礎学力の向上を目的とした学習を帯学習と称して実施しているのだが、その実施内容が揃っていないことについて指摘を受けた。

Y校長は指導内容をそのまま教員に伝えるのではなく、各学年会で協議するように促した。学年会では、強制的に帯学習の内容を揃えるのではなく、各クラスの実施内容を報告し合うことで、一週間を通せば実施内容が共通するシステムを構築した。学年会がそのような協議を実施できたのは、Y校長が赴任以来学年会を定期的開催するように促し、学年会の決定内容を尊重してきたことが影響している。教育委員会訪問で指摘を受けたのは帯学習に関することだけであったが、それを受けたY校長の対応を通じてM小学校の教員間の組織文化がより緊密となり、各教師の授業内容も改善されていった。



このたびの作業を通じ、本研究の枠組みを使用すれば、あらゆる授業研究の場面をエージェンシーと省察の往還を中心に、それが社会関係資本や人的資本とどう影響し合っていたかを分析することが可能であることが明らかになった。研究期間の限界から、授業研究の類型別の事例分析まではできなかったが、この枠組みは有効に機能すると予想している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 千々布敏弥	4. 巻 150
2. 論文標題 専門職資本と授業研究の関係 - カザフスタン調査を基に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立教育政策研究所紀要	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行, 田村知子, 岡田和子, 田中満公子	4. 巻 70
2. 論文標題 多文化共生教育に関する現職教員向け研修プログラムの開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 405-422
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32287/TD00032253	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行, 長谷川元洋, 山本朋弘, 中橋雄, 今野貴之, 関戸康友	4. 巻 45
2. 論文標題 学校における実践研究に対するオンラインコンサルテーション	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 105-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.S45056	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行, 小柳和喜雄, 野中陽一	4. 巻 45(2)
2. 論文標題 教職大学院実務家教員による教育実践研究の実態:教師教育者としての取り組みに注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 235-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.45035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄、後藤壮史	4. 巻 2021(2)
2. 論文標題 オンライン授業を対象とした双方向型演習における教師の授業力量形成に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 136-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jsetstudy.2021.2_136	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄、杉本喜孝	4. 巻 2021(1)
2. 論文標題 STEAM教育を学校組織で進めていく際の研究主任チームの役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jsetstudy.2021.1_14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田好章, Cai Yuying	4. 巻 2021(4)
2. 論文標題 表情分析の活用による授業分析の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 216-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jsetstudy.2021.4_216	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野弘幸	4. 巻 1011
2. 論文標題 生活科における体験 : 「小さな体験」が思考・表現を導く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村優	4. 巻 14
2. 論文標題 専門職の学び合うコミュニティPLCsの協働成熟を支える学校ネットワークとコンソーシアムの可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三河内彰子, 一柳 智紀, 木村優, 長谷川友香, 秋田喜代美	4. 巻 60
2. 論文標題 探究的な学びを通じた生徒Agencyの変容過程の検討 : 中高生の「語り」にもとづく発話分析とエピソード分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 663-681
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 サルカル アラニ モハメド レザ	4. 巻 54(2)
2. 論文標題 From 'chalk and talk' to 'guide on the side': A cross-cultural analysis of pedagogy that drives customised teaching for personalised learning	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 European Journal of Education	6. 最初と最後の頁 233-249
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ejed.12340	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴田好章	4. 巻 392
2. 論文標題 一人一人の子どもに応じた教育実践を展開するために : 授業記録にもとづく授業研究による教師の発達	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村優	4. 巻 4
2. 論文標題 教師の実践と専門性開発における情動の役割：情動の認知・社会的構成主義に基づく教師の情動研究の概観を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6. 最初と最後の頁 209-227
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄	4. 巻 4
2. 論文標題 専門的学習ネットワークが小中一貫教育校に持つ意味に関する研究：Professional Learning CommunityとProfessional Learning Networkの関係考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 129-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄	4. 巻 11
2. 論文標題 専門的な学習ネットワークが授業改善に向けた教員の指導性と主体性の構築に及ぼす影響に関する基礎研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院研究 紀要 学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村優	4. 巻 10
2. 論文標題 中等教育のカリキュラム・イノベーションを支えるプロセス・コンサルテーションの実践：OECD ISN福井クラスターの初期マネジメントの省察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教師教育研究 (福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻・紀要)	6. 最初と最後の頁 207-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 千々布敏弥
2. 発表標題 授業研究と実践研究の枠組みに関する考察
3. 学会等名 日本教師学学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千々布敏弥
2. 発表標題 授業研究とプロフェッショナル・キャピタルの関連 - カザフスタン調査を元に -
3. 学会等名 日本教育経営学会（千葉大学online）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千々布敏弥
2. 発表標題 集団意思決定としての校内研修が教師の自己効力感に与える影響
3. 学会等名 教師教育学会（明治大学online）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Britta Klopsch、久野弘幸、千々布敏弥
2. 発表標題 Thoughts on Teaching: Working alone and in teams in Germany and Japan
3. 学会等名 WALS（アムステルダム）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千々布敏弥、久野弘幸
2. 発表標題 授業研究を通じたプロフェッショナル・キャピタルの構築に関する実証的研究（その2）3府県の教員意識調査を元に
3. 学会等名 日本教育方法学会(東海学園大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 The prominence and sustainability of school as PLCs: A comparative study of system, culture and practice between Japan and US schools
3. 学会等名 International Congress for School Effectiveness and Improvement 2019 Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千々布敏弥、小柳和喜雄、木村優
2. 発表標題 授業研究を通じたプロフェッショナル・キャピタルの構築に関する実証的研究（その1）
3. 学会等名 日本教育方法学会(和歌山大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千々布敏弥、久野弘幸
2. 発表標題 How 'Lesson Study' Supports School to create Professional Capital in Practice: Lessons from Japan
3. 学会等名 APERA(シンガポールNIE) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千々布敏弥、久野弘幸
2. 発表標題 How 'Lesson Study' Supports School to create Professional Capital in Practice: Lessons from Japan
3. 学会等名 WALS(北京師範大学) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千々布敏弥、小野由美子
2. 発表標題 Promoting Teacher Collaborative Learning in Lesson Study: Exploring and Interpreting Leadership to Create Professional Learning Community
3. 学会等名 Japan-U.S. Teacher Education Consortium Conference (仏教大学) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 専門職の学び合うコミュニティとしての学校組織メカニズムの解明
3. 学会等名 日本教育心理学会 (慶應義塾大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 The prominence and sustainability of school as PLCs: A comparative study of system, culture and practice between Japan and US schools
3. 学会等名 International Congress for School Effectiveness and Improvement 2019 Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 専門職の資本と学び合うコミュニティを育む授業研究の持続・発展・進化の道標
3. 学会等名 日本教育方法学会(和歌山大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千々布敏弥
2. 発表標題 授業研究を通じたプロフェッショナル・ キャピタルの構築に関する実証的研究 - 授業研究の類型化の試み -
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 千々布敏弥
2. 発表標題 Revealing Diversity: Lesson Study as Platform of Teacher-Research Collaboration
3. 学会等名 World Association of Lesson and Learning Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 千々布敏弥	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 227
3. 書名 先生たちのリフレクション	

1. 著者名 アンディ・ハーグリーブス、マイケル・フラン著、木村優、篠原岳司、秋田喜代美監訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 406
3. 書名 専門職としての教師の資本	

1. 著者名 千々布敏弥	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 213
3. 書名 学力がぐんぐん上がる急上昇県のひみつ	

1. 著者名 千々布敏弥、内崎哲朗、小野由美子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 421
3. 書名 Promoting Teacher Collaborative Learning in Lesson Study: Exploring and Interpreting Leadership to Create Professional Learning Community, Tony Townsend ed., "Instructional Leadership and Leadership for Learning in Schools: Understanding Theories of Leading"	

1. 著者名 木村 優・岸野麻衣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 261
3. 書名 ワードマップ授業研究：実践を変え、理論を革新する	

1. 著者名 木村優	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京図書	5. 総ページ数 294
3. 書名 学校組織のアクション・リサーチ研究：高校における学校改革のアクション・リサーチを中心に，秋田喜代美・藤江康彦（編著）『学校教育実践研究のためのはじめての質的研究法：事例から学ぶ』	

1. 著者名 木原俊行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 215
3. 書名 「カリキュラム・マネジメントの意義」高橋純（編）『教育方法とカリキュラム・マネジメント』	

1. 著者名 木原俊行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 402
3. 書名 「カリキュラムの教育工学的研究」日本カリキュラム学会（編）『現代カリキュラム研究の動向と展望』	

1. 著者名 金子奨・高井良健一・木村優（編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 315
3. 書名 「協働の学び」が変えた学校：新座高校学校改革の10年	

1. 著者名 千々布敏弥	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 209
3. 書名 若手教師がぐんぐん育つ学力上位県のひみつ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小柳 和喜雄 (OYANAGI Wakio) (00225591)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	
研究分担者	久野 弘幸 (KUNO Hiroyuki) (30325302)	中京大学・教養教育研究院・教授 (33908)	
研究分担者	サルカルアラニ モハメドレザ (Sarkar Arani Mohammad Reza) (30535696)	名古屋大学・アジア共創教育研究機構(教育)・教授 (13901)	
研究分担者	木原 俊行 (KIHARA Toshiyuki) (40231287)	大阪教育大学・連合教職実践研究科・教授 (14403)	
研究分担者	木村 優 (KIMURA Yuu) (40589313)	福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成・院)・准教授 (13401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	柴田 好章 (SHIBATA Yoshiaki) (70293272)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授 (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関